

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新告知

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2018.12 Vol.33

平成30年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<https://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

クロイの時禱書

"Das Croy-Gebetbuch" — ①

■図書館散歩

マーケターの悩み ——— ②

文化政策学科長 教授
森山 一郎

研究室の本棚散歩 ——— ③

デザイン学科 准教授
小浜 朋子

■特集

わたしの1冊 ——— ④

～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース ——— ⑤



クロイの時禱書 "Das Croy-Gebetbuch"

解説: オットー・マツァール、ダグマル・トス Kommentar von Otto Mazal und Dagmar Thoss
岩波書店 1997年刊 貴重書庫 [196.1/Ku 73]

本書は、オーストリア国立図書館蔵 手写本 Codex 1858 〈クロイの時禱書〉の完全なファクシミリ版です。この刊本は全世界で980部の限定版ですが、金銀装飾を含む原本の装丁を完全に再現したものは290部です。そのうち50部が日本版として1997年に岩波書店から刊行されました。

クロイは、ブルゴーニュ公国の有力な貴族の中で最も重要で由緒ある名家のひとつです。『クロイの時禱書』という名称は既に長い間、ウィーンのオーストリア国立図書館のCodex 1858を指すものとして定着していますが、これはクロイ家の一員がこの写本の中に一種の記念帳（アルバム・アミコールム）風の書き込みを残しているからです。

時禱書は、キリスト教の平信徒のために書かれた個人用祈禱書で、時禱は毎日の定時の祈禱のことをいいます。『クロイの時禱書』の内容は、その基本的部分において、通常の時禱書の構成に従っています。月曆の後に、聖顔、聖十字架、聖霊にささげられた祈禱、聖母のミサ典文および四福音書抜粋が続いています。

本書は、フランドル写本芸術の代表的画家シモン・ベニングらによって彩飾され、装丁を含め完全な状態で今日に伝えられた絢爛たる時禱書を忠実に再現しています。月曆図、全頁大彩飾画に加えて、欄外には多数の花、鳥、昆虫、宝飾品、さらにヒエロニムス・ボッスの世界を彷彿とさせる怪物たちが描き込まれた、フランドル写本芸術の逸品です。

参考文献: オットー・マツァールほか[著]、荒木成子ほか[訳] 『クロイの時禱書』(解説書) [196.1/Ku 73]
平凡社編集部[編] 『世界宗教大事典』 [160.3/Se 22]
岩波書店Webサイト「クロイの時禱書」
<https://www.iwanami.co.jp/book/b257105.html> (閲覧: 2018.12.1)



文化政策学科長 教授
森山 一郎
Moriyama Ichiro

本文中に登場した図書

フィリップ・コトラー、ケビン・レーン・ケラー〔著〕
月谷真紀〔訳〕
『コトラー&ケラーの
マーケティング・マネジメント』
675/Ko 93

P.F.ドラッカー〔著〕、現代経営研究会〔訳〕
『現代の経営』(上)(下)
335.1/D 92

M.E.ポーター〔著〕、土岐坤ほか〔訳〕
『競争の戦略』
336.1/P 84

和田充夫、恩蔵直人、三浦俊彦〔著〕
『マーケティング戦略』
675/W 12

石井淳蔵ほか〔著〕
『ゼミナールマーケティング入門』
675/I 75

日経流通新聞〔編〕
『流通現代史：
日本型経済風土と企業家精神』
672.1/N 73

田島義博、原田英生〔編著〕
『ゼミナール流通入門』
675.4/Ta 26

田村正紀〔著〕
『流通原理』
675.4/Ta 82

石井淳蔵〔著〕
『マーケティングの神話』
675/I 75

奥出直人〔著〕
『デザイン思考と経営戦略』
336.17/O 54

水越康介〔著〕
『普通の人が、平凡な環境で、
人と違う結果を出す「本質直観」のすすめ。』
336.1/Mi 95

慶應義塾大学ビジネス・スクール〔編〕
『マーケティング戦略』
(ビジネススクール・テキスト)
675/Ke 26

嶋浩一郎、松井剛〔著〕
『欲望する「ことば」：
「社会記号」とマーケティング』
675/Sh 35

マーケターの悩み

私がマーケティングとのかかわりをもったのは実務的な関心からである。大学卒業後、大手スーパーマーケットに就職したが、小売業の現場というのは工夫がすぐに結果につながるという面白みがある。店頭で大量に商品を陳列してみる、季節感のある資材で売場を飾ってみる、あるいは値段を下げてみるなどの工夫が、すぐに売上という結果につながってくるのである。マーケティングというものを詳しく学んでみようと思うようになった。

大学院の修士課程でマーケティングを専攻した私は、いくつかの基本文献に取り組んだ。マーケティングの基本枠組みを学んだのが、近代マーケティングの父ともいわれるP.コトラーの『マーケティング・マネジメント[第4版]』である（現在では、K.ケラーとの共著で[第12版]まで出ている）。一方、マーケティングの重要性を説いてくれたのは、P.ドラッカーであった。彼は『現代の経営』で、企業の目的は顧客の創造であり、マーケティングとイノベーションこそが企業経営における基本的な機能だとした。また、ドラッカーは、「マーケティングの理想は販売を不要にすること」とも言っている。放っておいても売れていくような製品を作ることがマーケティングだというのである。マーケティングと販売を混同する人も見受けられるが、マーケティングの基本発想を理解するうえで分かりやすい言辞である。

修士課程在学中には、M.ポーターの『競争の戦略』にも影響を受けた。コスト・リーダーシップ、差別化、集中化といった競争戦略の基本類型は、マーケティングの基本枠組みとともに、市場適応問題を考える際に大いに参考となった。当時は、まだ日本人によるマーケティングのテキストは少なかったが、その後は、『マーケティング戦略』（和田・恩蔵他）、『ゼミナール マーケティング入門』（石井・嶋口他）など、マーケティングの基本を学べるテキストが多く出版されるようになった。

マーケティングを学んだ後は、また実務の世界に舞い戻った。勤務先が流通業だったこともあり、マーケティングの隣接領域である流通論も学ぶようになった。『流通現代史』（日経流通新聞編）、『ゼミナール流通入門』（田島・原田編）、『流通原理』（田村）などが流通に関する基本的な視座を養ってくれたように思う。

その後、私は飲料メーカーへと転じ、改めてマーケティング問題と向き合うことになった。マーケティングの現場では、消費者ニーズに「適応」することはもちろん、消費者ニーズを「創造」することが求められる。アップル社のiPhoneが良い例である。事前にiPhoneのようなものが欲しいと言った消費者はいなかった。発売と同時に、新たな消費者ニーズが創造されたのである。このように、消費者さえも気付かなかった新たなニーズを発掘・創造できれば、競争優位に立つことができる。

ではどうすべきか。これが、成熟市場における最大のマーケティング問題であろう。消費者ニーズを探るのであれば、市場調査を行えばよい。しかし、知りたいのは消費者さえも気付かない新たなニーズの種である。『マーケティングの神話』（石井）では、消費者による製品の消費過程もしくは消費経験の観察が重要だという。この発想の背景には、製品の価値とは、メーカー側が一方的に提供するものではなく、消費者が生活のなかでさまざまに創り出していくものだという考えがある。事実、「キットカット」など、当初はメーカー側が予想もしなかった使われ方をした製品は多い。デザイン発想をイノベーション創出につなげようとする『デザイン思考と経営戦略』（奥出）も、消費者の日常世界の観察・理解が重要だとする立場である。また、『普通の人が、平凡な環境で、人と違う結果を出す「本質直観」のすすめ。』（水越）では、ニーズの創造に向けては、市場調査や観察をきっかけとした自分なりの（きっとこうではないかという）確信を大切にすべきことを説いている。一方、『マーケティング戦略（ビジネススクール・テキスト）』（嶋口・和田他）では、消費者ニーズを重視しつつも、シーズ（種）志向の重要性が主張されている。すなわち、技術者の夢や熱意を画期的な新製品開発へと誘導するためのマネジメントが重要になるというのである。

ところで、マーケティング活動では、新たな社会記号を創り出すことによって、新たなニーズを掘り起こすことができる。『欲望する「ことば」』（嶋・松井）には、これまでも「アンノン族」、「朝シャン」、「激辛」などが、最近でも「おひとり様」、「女子力」、「インスタ映え」、「加齢臭」などの社会記号が新たな市場を創造したことが紹介されている。消費者ニーズの萌芽に社会記号がうまくはまると、一気に新たな市場が立ち上がるということである。

消費者ニーズへの適応とその創造、これらを巡ってマーケター（マーケティング担当者）の悩みは尽きないのである。



デザイン学科 准教授

小浜 朋子

Obama Tomoko

本文中に登場した図書

今和次郎〔著〕
『今和次郎採集講義』
380.1/Ko 71

千々岩英彰〔編著〕
『図解世界の色彩感情事典:
世界初の色彩認知の調査と分析』
757.3/C 43

今泉忠明〔監修〕
『ざんねんないきもの事典:
おもしろい!進化のふしぎ』
480/Z 1

増田奏〔著〕
『住まいの解剖図鑑:
心地よい住宅を設計する仕組み』
527.1/Ma 66

ミランダ・ブルース=ミットフォード〔著〕:
小林頼子、望月典子〔監訳〕
『サイン・シンボル大図鑑』
701.1/B 78

中村明〔著〕
『日本語語感の辞典』
813.1/N 37

中村明〔編〕
『感情表現辞典』
816.07/N 37

織田武雄〔著〕
『心理学ビジュアル百科:
基本から研究の最前線まで』
140/O 15

ウィル・バックingham〔著〕:
小須田健〔訳〕
『哲学大図鑑』
102.03/B 82

ウィリアム・リドウェル〔ほか〕〔著〕:
郷司陽子〔訳〕
『Design rule index:
要点で学ぶ、デザインの法則150』
757/L 61

アレックス・ジョンソン〔著〕:
北川玲〔訳〕
『世界の不思議な図書館』
010.2/J 64

週刊光源氏編集部〔編〕
『週刊光源氏：特別保存版総集編
「源氏物語」がまるごとわかる!?』
913.36/Sh 99

週刊光源氏編集部〔編〕
『週刊光源氏：総集編
源氏物語を女性週刊誌風に読む』
913.36/Sh 99

ヨシタケシンスケ〔作〕
『みえるとかみえないとか』
726.6/Y 92

伊藤亜紗〔著〕
『目の見えない人は
世界をどう見ているのか』
369.275/I 89

山口周〔著〕
『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?:
経営における「アート」と「サイエンス」』
159.4/Y 24

研究室の本棚散歩

先生方の研究室で本棚を拝見しながら気軽に話が交わせることは、大学に居る醍醐味のひとつである。本棚の本とそのレイアウトは脳が外化したようだと感じることもあるが、私の場合、仕事や研究に限らず、今まで興味をもった様々な分野の本をほとんど持ち込み、前任の先生が置いていってくださった本と合わせていくつかの“丘”ができています。外から見るとカオス状態かもしれないが、それらを眺めたり、新しい“小径”をみつけたりする時間は至福の時である。今回は、私の“散歩道”からいくつかの本を紹介させていただきたい。

『今和次郎 採集講義』は、生活と人に関わる様々な現象を緻密に描きながら分析しており、エネルギーとユーモアがあふれている。私は、大学では住まい方の研究を、企業では生活研究、商品提案、デザインリサーチを、休暇には高齢者の視覚の研究を、SUACではユニバーサルデザインに関する研究と、デザインフィロソフィの学生と一緒にオタク文化など個性に合わせたテーマの研究を進めてきている。目の前にある研究に没頭し、それを積み上げ絡み合っている今があるので、専門性を問われるのが少々苦手なのだが、この本を手にとると「人の生活に密着した研究」を365日楽しんでいるときっといいことにつながる、そう思えてくる。

企業のデザイン部門にいた頃、魅力的なデザインの本が次々と入れ替わっていくことをむなしく感じ、捨てられる本を拾うこともあった。その中で「不変な現象がデザインのコアになる」と気づき、全体が俯瞰でき、信頼性のあるデータが添えられていて、説明がわかりやすい事典や辞書、図鑑などに注目するようになった。『図解世界の色彩感情事典』は文化や風土が配色の好みに与える影響について20か国を対象に調査し、分析結果をビジュアル化した大著である。編集者である武蔵野美術大学教授（当時）の千々岩英彰は「研究を支えたのは世界のだれも見たことのないデータを集めているという感動と自負。産業界での利用価値を期待して全データを公開した。」と語っており、その研究姿勢に感服する。これに続くグローバル比較のデザイン研究が集大成できるよう祈念して、書棚の一等地に置いている。最近のベストセラー『ざんねんないきもの事典』は、“ざんねん”という言葉と動物を対象にすることで一見茶化したように見せつつも、人間にとって大切なコトに気づかされ、「伝えるデザイン」の巧みなノウハウも満載である。『住まいの解剖図鑑』、『サイン・シンボル大図鑑』、『日本語 語感の辞典』、『感情表現辞典』、『心理学ビジュアル百科』、『哲学大図鑑』など、この類の本の散歩道に入りこむとなかなか戻ってくることができない。

デザインのノウハウ本の中でお薦めをひとつあげるとすれば、『要点で学ぶ、デザインの法則150』である。バージョンアップしながらグローバルに展開されており、いつの時代にも、あらゆる分野のデザインの現場に通用する内容として、世界で20万人以上に読まれているといわれている。本のまとめ方も簡潔で、初心者にも理解しやすい。

図録、写真集、絵本は理屈なしに視野を広げてくれる。『世界の不思議な図書館』は2016年初版の本であることが信じられないようなローカルな図書館と近代的な図書館が混在しており、そのギャップに驚く。「図書館」という場を通して、世界の多様性に改めて気づかされるとともに、本を求める気持ち、本を手にした子供たちの笑顔が世界共通であることにほっとする。

ちょっと邪道ではあるが、週刊誌のフォームを使って源氏物語を描いた『週刊光源氏（1）（2）』は、15年前書店で見かけて即買いしてから現在まで、紹介した人からの反響はいつも大きい。登場人物の言動を、独特のレイアウトで少しスキャンダラスに表現することで、原著の内容が記憶に残りやすくなっているように感じる。賛否両論あると思うが、ここにも「伝えるデザイン」のヒントがあるように思う。

最後に、今私が最も熱い絵本、ヨシタケシンスケの『みえるとか みえないとか』を紹介したい。伊藤亜紗の新書本『目の見えない人は世界をどう見ているのか』と出会い感化され、「視覚に頼らないで生活することも、おもしろさがある」ということを、視覚に障がいをもつ当事者に反感をかわれないような表現を考え、仕上げるのに3年かかったそう。私が伝えたいユニバーサルデザインのコアコンセプトがみごとに詰まっており、学生にもそれが十分に伝わっている。素晴らしい！

結局、文字の詰まった本のご紹介は少なく、私の稚拙な脳をご披露したようでお恥ずかしいが、これを機会に研究室の本棚散歩の仲間が増えることも嬉しい。『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』についても、どなたかと話を交わしてみたいと思っている。万歩計の数字は増えなくとも、きっと脳は活性化されると思う。

『いつか春の日のどっかの町へ』

大槻ケンヂ [著]
KADOKAWA, 2017.2
[767.8/0 89]



この本は、ロックバンド「筋肉少女帯」のボーカル兼、作詞をつとめる大槻ケンヂ氏のエッセイ集です。このバンドのファンの方はご存じでしょうが、彼の書く詩には「UFO」「宗教」「ゾンビ」といった怪しい世界観と、「ダメ人間」「自殺」のようなネガティブな言葉が多く使われています。それは彼の魅力の一つであり、上手くいかない生活に不満をもつ人々の共感を得ました。

このエッセイでも日々の生活で上手くいかないことを書いています。「アウェイ感」と表現されたそれは、自分の人生はこれでいいのだろうか、この先どうしたらよいのだろうか、という不安です。以前の大槻ケンヂ氏なら、「辛くてもこれでいいのだ」と言って勇気づけてくれたでしょうが、この本では違います。それはなぜか、序盤に述べられる「永遠も半ばを過ぎて」という言葉にその答えがあるように思います。

前半では、40代も後半にさしかかり、友人や兄弟と死別することが書かれます。自分だけ生き残ったのはなぜか、そう考え彼はギターを始めます。タイトルや表紙、「さすらいの、長い旅にはギターが似合う」という帯のあおり文など、この本は旅立ちを感じさせます。「じゃあな」という曲でライブが終わるとともに、このエッセイ集も終わります。そこには、嫌なことから逃げるだけでなく、楽しいことを探しに行こう、そんなメッセージが込められているように感じます。

新しいことを始めるにはエネルギーが必要です。本当にそれをして意味があるのか疑問に思うこともあります。大槻ケンヂ氏の文からは、そんな葛藤が感じられるとともに、ギターを始めてよかったという気持ちも感じます。店で試しに弾いてみたとき、ライブの楽屋で練習しているとき、周りの目を気にして恥ずかしくなるといった部分から感じ取れる彼の姿は、とてもロックスターには見えませんが、愛らしく応援したくなります。

知識がついたり、思考力が養われるようなものではありませんが、上手くいかない時、疲れたときに元気を与えてくれる本です。

【文化政策学部 国際文化学科 3年 水嶋 晃平】

芸術文化に接するこの大学に入学してからは勿論、入学する前にも、教養としてギリシャの哲学や芸術に触れ、学んだことのある方も多くいらっしゃるでしょう。今回紹介する本は、ごく当たり前に触れてきた古代ギリシャの人々の価値観や、宗教観などの当時の日常的な感覚や思想を楽しく学べる一冊です。

皆さんは「エーゲ海」を形容する際にはどのような単語を思い浮かべますか？多くの人が「青い」「波打つ」などの単語を想起するのではないのでしょうか。しかし、当時の感覚を用いて形容すれば、それは全く違うものとなります。なんと「紫色」「ワイン色」などの言葉が当てはまるのです。ギリシャの哲学や芸術などの教養分野は現在も広く知れ渡っていますが、こういった当時の感覚や基盤にある考えのようなものは殆ど伝わっていません。このような事実や差異は、人から指摘されたり、差異に直面したりしないと非常に気付きにくいものです。この本を読むことで、これまで無自覚だった知識や認識の穴に気付き、埋めるといった経験が出来るのではないのでしょうか。多文化理解に興味を持ち、学ぶために注目する人は多いと思います。しかし、見えているものだけではなく、歴史や思想など、もっと根幹の部分を理解することで、改めて出来る配慮や、別側面に気付く為のアプローチ方法が生まれることもあります。

芸術を尊重し、関わっていこうと思っている人や、幅広い人材と関わる上で多文化理解を深めたいと思っている人に読んでもらい、苦にならない楽しい気持ちばかりの勉強方法として、この本をオススメします。また、ギリシャ神話を堅いもの、神話なんて面白みがないと考えて触れてこなかった人にもオススメです。神々の経歴を見て、思わず笑ってしまう人も多いと思います。知識が少ないからこそ、古代ギリシャの人々の想像力や発想力の豊かさに驚き、当時の人々のように心を躍らせる、疑似体験が出来るのではないのでしょうか。

【文化政策学部 芸術文化学科 2年 鈴木 好妃】

『古代ギリシャのリアル』

藤村シン [著]
実業之日本社, 2015.10
[231/F 63]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

昨夜、この原稿を書くために再びこの本を手にし、そのまま最後まで読み切ってしまいました。それほど短い小説です。作者はサン＝テグジュペリ、「星の王子さま」で有名ですね。知っている方も多いと思いますが、彼はパイロットでした。飛行機が実用化されて間もない時代です。一回一回のフライトがまさに命懸けでした。この小説の舞台は、そんな時代の航空輸送会社。はじめは天候も良く穏やかに見えた夜に暴風雨が潜んでいて、一機の飛行機が行方不明になります。ストーリーはこの会社の支配人を中心に、操縦士やその妻など様々な視点から描かれます。淡々とした状況描写と、哲学的な登場人物の言葉が、とてもきれいです。

私がこの本に感銘を受けるのは、それぞれの人物が信念を持って自分の仕事をまっとうしている様子をリアルに感じることができるからでしょう。主人公の支配人は、冷酷なまでに厳格な人間です。例えば出発の遅れについては、理由が悪天候であったとしても一様に罰します。こうすることで常に出発への緊張感を持たせ、気のゆるみを排除しているのです。このような彼の姿勢は、新撰組の土方歳三を彷彿とさせるものがあります。命を賭して業務を遂行する部下をもつ人間には、通じるものがあるのでしょうか。支配人だけでなく、困難なフライトの後も多くを語らない操縦士や、危険を知らずながら夫を送り、迎える操縦士の妻などの姿も印象的です。

また、操縦士たちが機上から見える地上の様子を語る言葉がとても詩的で、一人一人の人間の営みが尊いものであることを認識させてくれます。少し引用しましょう。その後行方不明になる操縦士が、夜の飛行中に家の灯を見て回想する場面です。

あの農夫たちは、自分たちのランプは、その貧しいテーブルを照らすだけだと思っている。だが、彼らから八十キロメートルも隔たったところで、人は早くもこの灯火の呼びかけを心に感受しているのである。(p.23)

常に死と隣り合わせの中で、誇りを持って仕事をする姿と研ぎ澄まされた感性が、心に残る一冊です。

【英語・中国語教育センター 特任講師 上村 明英】

『夜間飛行』

(新潮文庫)

サン＝テグジュペリ [著];

堀口大馬 [譯]

新潮社, 2012.12

[953.7/Sa 22]



『最高裁回想録： 学者判事の七年半』

藤田宙靖 [著]

有斐閣, 2012.4

[327.124/F 67]



このたび皆さんにご紹介するのは、2010年4月に定年退官を迎えるまでの7年半にわたって最高裁判事を務めた著者による、当時の生活やそこでの思いを記した回想録です。最高裁判事に限らず、裁判官であった当時の体験をふまえて書かれたものは少なくありませんが、敢えてこの本を選んだのは、裁判所のなかでもやはり最高裁という、ほとんどの国民にとってヴェールに包まれた特別な場所が舞台であること、そして何より、著者は最高裁判事として任官するまでの36年間、東北大学で教鞭を執った著名な行政法学者だからです。ちなみに、私の専門も、法学のなかでも行政活動を規律する諸法を扱う行政法という分野です。

本書の後半には付録として、著者が関与した事件における自らの個別意見が収録されています。遠州鉄道上島駅の高架化などをめぐる浜松市土地区画整理事業計画事件における補足意見をはじめ、今日まで繰り返し引用される、収録された数々の個別意見の学問的な重要性はさておき。この部分まで読むかどうかは皆さんにお任せするとして、本書の前半には、法律や裁判に少しでも関心をもつ多くの方にとって、とくに専門的な知識がなくとも（法的論点に触れる部分などは少々難解かもしれませんが）、興味深く読むことのできるエピソードがたくさん詰まっていると思います。個人的には、著者が住まいとした古い一戸建て宿舎にて、夜分、誰もいないはずの階下に人の気配がする、もしやその昔此处に住んだ東条英機氏か、それとも…というくだりが気に入っています。また、1年をとおした宮中との関わりも大変印象的でした。

教員としての職を得て初めて本学に着任して以来、学問としての法学や、いまの私に何ができるかについて、自らに問い続けてきました。学者と裁判官の間で、学問と実務を扱うそれぞれの役割や思考経路の違いを考察した筆者の言葉が、一層心に響きます。これからも何度も開くであろう、私の大切な1冊です。

【文化政策学部 文化政策学科 講師 山本 紗知】

特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

『小さき町にて： フィリップ短篇集』

(岩波文庫)

シャルル＝ルイ・フィリップ [著]；

淀野隆三 [譯]

岩波書店，1951

[953.6/P 54]



フランスの短編小説集『小さき町にて』は、人間の弱さを愛おしく包み込んでくれる物語です。舞台は、約100年前のフランスの片田舎。職人の家に生れた作者シャルル＝ルイ・フィリップは、町の名士やお金持ちには目もくれず、大工さんや木靴屋さん、パン屋さんなど庶民のつましい暮らしを描きます。ひねくれた子どもから、のんだくれ亭主、頑固なお年寄りまで、老若男女のささやかな「罪」に、慈愛に満ちたまなざしを注ぎました。

その中の1編。「隣どうし」に出てくる、共に独り暮らしのおばあさん2人。毎朝お互いの家を訪ねては一緒にコーヒーを飲む、いわゆる茶飲み友だちです。ある日、一方のおばあさんが一番煎じのおいしい方を自分に、味も匂いもない出殻を相手に差し出したから、さあ、大変。次の日は相手のおばあさんも、同じように出殻で対抗します。その仕返し合戦はますますエスカレートして、ついには相手を目の敵とまで思うようになります。

そのうち1人が息子夫婦に引きとられることになりました。「清々した！」と思ったのも束の間、いざ離ればなれになってみると、なぜか寂しさがわいてくるのです。町の外れに越したおばあさんは、たった1週間でこらえきれなくなります。「ミサに行くついで」とうそぶきながら、かつてのお隣さんを訪ねると、そこではおいしい出花のコーヒーでもてなされます。

なんとも微笑ましい、お伽噺のような結末です。短編集のなかには、強情さがとり返しのつかない不幸を招く逸話もありますが、説教じみた教訓はありません。繊細な心の動きが淡々と綴られているからでしょう。忙しい時にこそ読み返したくなる本の1つ。キリスト降誕の翻案もありますのでクリスマスの季節に、戦前の味わい深い翻訳とともにおすすめします。

【文化政策学部 芸術文化学科 講師 井上 由里子】

わたしの1冊としてお薦めしたいのは『日本建築辞彙』です。文字通り日本建築の用語辞典です。最初に会ったのは、日本の伝統建築を学びはじめた学生時代でした。聞き慣れない用語に遭遇した時に紹介された1冊です。その当時はすでに絶版となっていた本書は、常に手元にあるわけではありませんでした。その待望の1冊が平成23年（2011）に新訂版として出版され、愛読することができるようになりました。

『日本建築辞彙』という少し難しそうな辞典は、明治39年（1906）、中村達太郎博士（東京帝国大学工科大学教授）によって刊行され、見出し語の配列が「い・ろ・は…」順というものでした。「はしがき」に記された編纂の主旨をいくつかご紹介いたします。「高橋より印半纏の立場をとれり」「文字よりは言葉に重きを置いた。」「免に角本書は学者の見るべき高尚のものではないのだ。予は技術家のために書いたのである。」『日本建築辞彙』は、日本の近世までの建築技術を基礎に、西欧の技術を取り込んだ、建築技術家のための日本建築辞典として編まれました。日常生活でも馴染みのある「語」も多く収録されていることから、歴史的辞典として、民俗学的実用辞典としても広く活用されてきました。その後、昭和6年（1931）に改訂増補版が刊行され、見出し語が五十音順の配列となり、今回の新訂版では、現代仮名遣いに改められて、詳細な注釈が加えられる等、さらに充実した1冊になっています。

現代の私たちは、事典・辞書のデータベースやインターネットの検索サイトを用いて手軽に情報収集できるようになりましたが、ぜひ辞典を手にとってください。見開きの頁に込められた数文字違いの「語」。調べたい「語」だけでなく、その前後の「語」も面白く、見開き頁の多様な世界が次の文献へと導いてくれます。

最後に、「いろは引」の初版本は、国立国会図書館デジタルコレクションにて公開されています。国立国会図書館の豊富なデジタルコレクションもぜひ覗いてみてください。

【文化・芸術研究センター 講師 新妻 淳子】

『日本建築辞彙』

(新訂)

中村達太郎 [著]；

太田博太郎、稲垣栄三 [編]

中央公論美術出版，2011.10

[521.033/N 37]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

最近ではめっきり自分の研究関連の本しか読む余裕がなくなっているのですが、幼いころから本と触れ合うことが好きでした。物語を読んで、自分がその世界へ飛び込んだような空想をする。いつしかそれは自分でも物語を創作することにつながっていきました。

小説、漫画、戯曲、詩など、この大学には、形はそれぞれ違ったとしても創作をすることが、好きな人が多いのではないのでしょうか。今回、紹介する「場面設定類語辞典」は創作活動をする皆さんにオススメの本です。

項目は「郊外編」と「都市編」の2つに大きく分かれ、計255パターンの場所・環境・背景が紹介されています。各項目では見る、聞く、かぐ、味わう、触れるといった五感をはじめ、物語が展開するためのキー、登場するだろう人物例、設定の注意点とヒント、例文がまとめられています。さらに設定を考えるための付録が付いているため、創作のためのエクササイズを行うこともできます。元々はアメリカで出版された本であり、アメリカの生活習慣や文化に即して描写されています。日本語版に翻訳するにあたって、日本の慣習に当てはめる調整は最小限しかされていないそうですが、それでも十二分に使うことができます。

私たちでも簡単に足を運ぶことができる「大学のキャンパス」や「カフェ」の気付かずにいた、あるいは知らない一面をこの辞典では見ることが可能ですし、一方で「北極のツンドラ」や「タトゥースタジオ」といった何かしらの意思がなければ縁がなく、馴染みもないようなものもこの辞典には載っています。この辞典をパラパラと読んでいくだけでも、自分の世界の奥行きが広がっていくような、そんな感覚を楽しむこともできます。

自分の創作が一边倒だと悩んでいる方も、何か創作をするのに材料が欲しいという方も、この辞典に触れてみるのはいかがでしょうか。

【大学院 文化政策研究科 2年 光岡 香菜子】

『場面設定類語辞典』

アンジェラ・アッカーマン、
ベッカ・パグリッシ [著]；
滝本杏奈 [訳]

フィルムアート社、2017.4
[901.307/A 15]



『風が強く吹いている』

三浦しをん [著]
新潮社、2006.9
[913.6/Mi 67]



「あーあ…今日も閉まってる…」

学校図書室の扉の窓から、たくさんの本を眺めたのは一度や二度ではありません。幼い頃から本が大好きで、本を手にした時の胸がポンポンと跳ねるような感覚は、大人になった今でも変わりません。小学校から高校までは図書室に恵まれることはなく、両親の難しい漢字ばかりの本を辞書片手に時間をかけて読んだものです。本と関わっていたいと思っていた私が「古書の博物館 岩瀬文庫」で勤務することになったのには何かの縁を感じます。（今度は、本はあるのにくずし字が読めないということで悶々とするのですが…）現在は文化事業を担当し、文化会館や岩瀬文庫などの会場に合わせて企画を考えたりしています。

さて、今回ご紹介するのは、岩瀬文庫で開催した事業のなかで出会った一冊、『風が強く吹いている』です。本書は竹青荘（通称アオタケ）に住む寛政大学の学生10人が箱根駅伝を目指す物語です。陸上経験者の清瀬灰二や蔵原走、陸上は初めてというアオタケのメンバーなどの登場人物を、会話や仕事から想像することができ、練習をしている描写では、アオタケの住人と一緒に自分も走っているかのような感覚になる場面もあります。

物語のなかで「強い」とは何なのかということが何度も問われます。「長距離選手に必要なのは、本当の意味での強さだ。」という清瀬のことばがあり、本書を読み返す度に「強い」とはどういうことだろうかと考えさせられます。そして、その意味を誰かと語り合いたくなります。清瀬のことばを蔵原やアオタケのメンバーはどのように受け止め、どう考えたのでしょうか。彼らが伝え合う「ことば」にも注目です。

著者の三浦しをんさんの作品は映画化されているものが多く『神去なあな日常』や『舟を編む』などがあります。本書も2009年に実写映画化されています。年始の箱根駅伝をご覧になる前に読むのもおすすめです。この本が皆様の胸に留まるような一冊となれば幸いです。

【大学院 文化政策研究科 2年 岩瀬 理絵】

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2018を開催しました

静岡文化芸術大学では、身体的・知的特性、年齢、文化などを越えて、皆が一緒に楽しむことのできるユニバーサルデザインの考え方を採り入れた絵本を募集し、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2018」を開催しました。受賞作品は以下のとおりです。多数のご応募ありがとうございました。

■ユニバーサルデザイン研究賞

「ぼくの大きさ パート1」 桐島さおり（浜松市）

■審査委員長特別賞

「ぼんちゃんの虫めがね」 佐藤愉大（浜松市立中ノ町小学校4年）

《子ども部門》

■優秀賞

「ポチくんの1日」 小柳瑠菜（浜松市立内野小学校4年）

「15年にいちど 火星大接近」 桑原康成（浜松市立雄踏小学校4年）

■佳作

「ちょうちょとお花畑」 小林加代子（浜松市立浜名小学校1年）

「自分の好きなものを布絵本で」 宇城市立中央図書館

「ボウニンゲン的一天」 金岡翠夏（浜松市立湖東中学校2年）

「とびだすえほん」 赤木翔星（宮崎市立宮崎西中学校2年）

《高校生部門》

■優秀賞（該当作なし）

■佳作

「ブーブブッ」 田原柊（静岡県立浜松大平台高校2年）

《一般部門》

■優秀賞・学生大賞

「チエちゃんちのにゃんごろう」 金國里恵（静岡市）

■佳作

「ソトアソビ」 いぶき（八王子市）

「香りの本」 城リノ 丹羽雅子 樋口彩夏（専修大学文学部4年）

「ゆらりん」 佐藤茉莉花（女子美術大学4年）

「てってって」 板岡優里（女子美術大学4年）

※受賞者の敬称は省略させていただきました。



ユニバーサルデザイン
絵本コンクール2018
作品展示会ポスター
(ポスター制作: デザイン学部
デザイン学科 3年 町田 優香)



表彰式



「ぼくの大きさ パート1」 （ユニバーサルデザイン研究賞）



「チエちゃんちのにゃんごろう」 （一般部門優秀賞・学生大賞）



「ぼんちゃんの虫めがね」 （審査委員長特別賞）



「ポチくんの1日」 （子ども部門優秀賞）



「15年にいちど 火星大接近」 （子ども部門優秀賞）